

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

4月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,305.45 (10日)	1,269.50 (23日)
国内建値(円/g)	: 4,696 (11日)	4,600 (24日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 112.10 (1日)	113.28 (25日)

4月の海外金相場は\$1,291.90/toz(トロイオンス)でスタート、上旬はドル高基調から\$1,300台を割り込んだまま推移していたが、9日に国際通貨基金(IMF)が2019年の世界経済の見通しを下方修正したことを受け、10日には\$1,305.45と2週間ぶりの高値をつけた。中旬では、ドル高基調に加え、世界的な株高から、再び\$1,300台割れとなった。下旬でも金価格の下落基調は衰えず、23日には\$1,269.50と年初来の安値をつけるとともに、4か月ぶりの安値となった。これまで金相場の下値を支えていた世界景気減速への懸念がひとまず後退し、安全資産の金から資金を引き揚げる動きが堅調になったことに加え、上場投資信託(ETF)の残高も減少が加速し、さらに金融市場の楽観的な見方が台頭したことも大きかった。その後は、売られ過ぎからやや値を戻し、30日には\$1,282.30をつけて越月した。

2. 為替相場推移

4月の為替相場は1日に\$1=112.10円(TTS相場、以下同じ)でスタート、これが月間最高値となり、その後は円弱含みで推移、概ね\$1=112~113円での展開となった。25日には\$1=113.28円をつけ、大型連休直前に月間最安値をつけた。

上旬は米雇用統計など米国経済の底堅さを示す経済統計を材料に\$1=112円台後半をキープした。中旬も米経済指標の上向き傾向から米国景気の堅調さを意識した円売り・ドル買いが優勢となったことで、\$1=113円台まで円安が進んだ。下旬でもドルの堅調さが目立った展開となった。米連邦準備理事会(FRB)は2019年に入り、利上げを休止する方針に転じ、3月には年内の利上げを見送る姿勢を示したにもかかわらず、ドルへの資金流入が継続し、欧米のイースター休暇明け後には、上記通り、25日には\$1=113.28円をつけ、4か月ぶりの円安・ドル高水準となった。26日には米株安から、\$1=112.85円をつけて越月した。

4月の円の対ユーロの動きは、対ドルとは反対に上旬で円安・ユーロ高となり、下旬では円高・ユーロ安となった。下旬での円高・ユーロ安は欧州景気の減速を懸念したユーロ売りが出たためであった。

【国内】

1. 建値推移

4月の国内金山元建値は1日に4,643円/g(グラム)でスタート、上旬から中旬にかけては、上旬での海外相場の回復基調からやや上向き、11日には4,696円と月間最高値をつけた。ところが、下旬では海外相場の弱含み傾向から続落、24日には4,600円と月間最安値をつけるとともに、本年1月以来の安値となった。26日には、やや戻し4,625円となって越月した。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2019年3月分=平成31年3月分)

生産 : 8,166 kg (前月比 2.6%増、前年比 26.2%減)
出荷 : 9,119 kg (前月比 2.8%減、前年比 15.0%減)
在庫 : 3,938 kg (前月比 20.5%減、前年比 37.2%減)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

3月の生産は2か月ぶりの前月比プラスだが、前年同月比は2か月連続のマイナス。出荷は期末でも冴えず、前月比、前年同月比とも2か月連続の減。在庫も出荷同様、前月比、前年同月比とも2か月連続の減。

3. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2018年度計=平成30年度計)

生産 : 122,164 kg (前年比 9.4%増)
出荷 : 124,380 kg (前年比 11.6%増)
在庫 : 3,938 kg (前年比 37.2%減)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

2018年度の生産は前年度比9.4%増の122tと再び増加した。2011(平成23)年度の127t以来の高水準。出荷も生産に合わせ2年ぶりの大幅増。在庫は年度央に積み上がるも、年度末にかけては反対に減少基調となった。

銅

【海外】

2019年4月のLME銅相場は前月に引き続き\$6,400/t圏を変化に乏しく推移した。英国のEU離脱(ブレグジット)をめぐっては、英国が離脱期限を4月12日から6

月 30 日への延長を求めたのに対し、EU は臨時首脳会議で 10 月 31 日まで再延期することで合意した。トウスク欧州理事会議長は最大で 1 年の延長を提案したが、欧州委員会 (EC) 執行部の任期期限である 10 月に落ち着いた。

米国経済は 3 月の連邦公開市場委員会 (FOMC) の議事録により、労働市場は引き続き力強いが、経済活動は第 4 四半期に比べ鈍化したことが確認された。インフレ率は 2020、2021 年の 2% 目標をわずかに上回ると予想され、今年の実質 GDP 成長率予想の中間値は 2.1% であった。米連邦準備制度理事会 (FRB) は年内の利上げを見送る方針を示唆した。一方、今年第 1 四半期の実質 GDP 成長率は前期比 3.2% / 年増と前期の 2.0% 増を大幅に上回った。

中国経済をめぐるのは景気好転を示す指標が相次いだ。第 1 四半期の実質 GDP が前年同期比 6.4% 増ともう一段の減速は回避された。3 月の輸出額が前年同月比 14.2% 増と 5 か月ぶりの大幅な伸びとなった。輸入額は 7.5% 減と市場予想より大幅な落ち込み。鉱工業生産指数は 2014 年 7 月以来の高い伸び、小売売上高は昨年 9 月以来の高水準、1~3 月の固定資産投資は昨年 1~4 月以来の高水準となった。

供給障害要因としては、MMG は 4 月 13 日、ラスバンバス銅鉱山 (ペルー) からの銅精鉱輸送を再開した。地元住民による 68 日間に及ぶ道路封鎖は解除された。住民側は 2 月 18 日、政府が彼らの農用地を通過する州道を同鉱山開発協定に基づいて国道に変更したと主張し道路封鎖を開始したが、政府仲裁の下、4 月 12 日、同社が道路の使用料を支払うことで住民側と和解した。地元住民の雇用や開発協定の遵守についても合意した。

コデルコはチュキカマタ銅製錬所 (チリ) の操業を 4 月末までに再開し、5 月後半までに立ち上げる見通しを示した。同製錬所は昨年 12 月 13 日付政令 28 条により二酸化硫黄/砒素回収率が従来の 90% から 95% に引き上げられたため、硫酸プラント 2 基の新設工事中。3 月末には SNC ラバリンとの工事請負契約を解除した。1 基目のプラント稼働開始から 15~20 日後に 2 基目が稼働する見通し。二酸化硫黄/砒素回収率は 96% に改善する。しかし、6~7 月までずれ込むとの見方もある。

ルミナカパーはカセロネス銅鉱山 (チリ) のトラック修理工場の外で 4 月 16 日の午後、下請け作業員 1 名の死亡事故が発生し、操業を停止したことを確認した。

カタンガマイニングは 4 月 15 日、カモト銅コバルト鉱山 (コンゴ民主共和国) のコバルト鉱石出荷を部分再開したと発表した。同社は昨年 11 月、コバルト鉱石に基準値を超えるウランウムが検出されたため、コバルト精鉱輸出を一時的に停止したと発表した。ウランウムを除去するイオン交換プラントの建設工事は今年 6 月までに完了する見通し。

モパニカパーマインズ (MCM) は 4 月 10 日、ヌカナ、ムフリラ銅鉱山 (ザンビア) の操業を再開した。ムフリラ鉱山では今年 2 月に坑内火災で 3 名が死亡、ヌカナ鉱山では 3 月に坑内爆発で 2 名が死亡したが、事故原因調査が完了した。

スターライトインダストリーズのツーチコリン銅製錬所(インド)は 2018 年度(2018 年 4 月～2019 年 3 月)の銅カソード生産が 90 千tに激減した。前年度実績は 403 千t。同製錬所は昨年 5 月、環境汚染に対する抗議行動で死亡事故が発生したことを受けてタミールナドゥ州政府の命令により閉鎖された。

フリーポートインドネシアのグラスベルグ銅鉱山(インドネシア)で4月3日、土砂崩れが発生し、2名が負傷、2名が行方不明となった。操業への影響はない。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2019年1月の世界の銅鉱石生産は前年同月比横ばいの1,692千t、地金生産は3.0%増の2,054千t、消費は3.3%増の2,062千t、地金需給バランスは▲1千tから▲8千tへとほぼバランス推移した。報告在庫は19.7%減の1,212千t、在庫/消費比率は3.0週間から2.4週間へと低水準で推移している。

鉱石生産の内訳は精鉱、SXEWともに横ばい。鉱石生産はチリ、インドネシアが減少、その他は総じて増加した。チリは鉱石品位の低下により4%減少、インドネシアはグラスベルグ、バツヒジャウ鉱山の採掘鉱体の移行により45%減少した。コンゴ民主共和国(DRC)、ザンビアは休止鉱山の再開により増加傾向にある。ペルー、オーストラリア、中国、モンゴルも鉱石品位の改善により増加した。地域別には、アフリカが10%、ラテンアメリカは3.5%、オセアニアは10%、オセアニアが5%増加したが、ラテンアメリカとヨーロッパは横ばい、アジアは4%減少した。鉱山稼働率は81.6%でほぼ横ばい。

地金生産の内訳は一次生産が3.1%、二次生産は1.9%増加した。国別には、中国が能力増強を背景に増加した。オーストラリア、ブラジルは生産障害からの回復により増加した。DRCのSXEW生産も増加した。しかしながら、チリはチュキカマタ製錬所の環境改善工事に伴う操業停止により14%減少した。インドはツーチコリン製錬所の操業停止が続いている。地域別には、アフリカが7%、アジアは6%、ヨーロッパは2%、オセアニアは25%増加、アメリカは7.5%減少した。精製工場の稼働率は85.5%から86.8%へとやや上昇した。

中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)はネット輸入がスクラップ供給タイト化を背景に12%増加したことから9%増加した。その他主要消費国のなかではインド、ロシアが増加、日本、EU、韓国は減少した。中国を除く世界は2%減少した。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

4/1 760 4/4 770 4/11 760 4/16 770 4/24 760

2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2019年3月分=平成31年3月分)

生産 : 125,800t (前月比 8.5%増、前年比 10.1%減)

出荷 : 133,100t (前月比 0.9%増、前年比 7.5%減)
在庫 : 94,500t (前月比 7.0%減、前年比 1.1%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2019(平成 31)年 3 月の銅地金生産は前月比 8.5%増、前年同月比 10.1%減の 125.8 千tとそれぞれ 3 か月ぶりの増加、2 か月連続の減少となった。出荷は前月比 0.9%増、前年比 7.5%減の 133.1 千tで 2 か月連続の増加と 2 か月ぶりの減少。内訳は内販が前月比 5.0%増、前年比 4.2%増の 84.3 千tで 2 か月連続と 3 か月ぶりの増加。輸出は前月比 5.4%減、前年比 22.6%減の 48.8 千tで 3 か月ぶり、2 か月ぶりの減少。内販のうち電線向けは前年比 6.1%増の 52.8 千tで 2 か月ぶりの増加。伸銅品向けは 7.1%増の 29.9 千tと 3 か月ぶりの増加。在庫は前月比 7.0%減、前年比 1.1%減の 94.5 千tで 2 か月連続と 4 か月連ぶりの減少となった。

3. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2018 年度計=平成 30 年度計)

生産 : 1,571,300t (前年比 4.0%増)
出荷 : 1,595,800t (前年比 3.7%増)
在庫 : 94,500t (前年比 1.1%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018(平成 30)年度の生産は前年度比 4.0%増の 1,571.3 千tと前年の佐賀関、東予製錬所の大型定修に伴う生産効率の改善により 2007(平成 19)年度に次ぐ史上 2 位を記録した。出荷は 3.7%増の 1,595.8 千tで 2015(平成 27)年度以来の高水準となった。内訳は内販が 0.7%増の 988.9 千tと 2014(平成 26)年度以来、輸出は 9.1%増の 606.9 千tで 2012(平成 24)年度以来の高水準。内販のうち電線向けは 2.8%増の 622.0 千tと 2014(平成 26)年度以来の高水準、伸銅品は 1.4%減の 334.4 千tで 3 年ぶりに減少した。在庫は 100 千t水準を安定推移した。

4. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、2019(平成 31)年 3 月の銅電線出荷は前月比 4.6%増、前年同月比 0.2%減の 59.3 千t(推定)と前年比は 3 か月ぶりの減少。うち内需は前年比 0.4%減の 57.1 千tで 3 か月ぶりの減少、輸出は 5.7%増の 2.2 千tで 3 か月連続の増加。内需の部門別には、自動車と建設電販が 6 か月連続の増加、電気機械は 7 か月連続、その他内需は 4 か月連続、電力は 3 月連続、通信は 2 か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、2019(平成 31)年 3 月の伸銅品生産は前月比 3.6%増、前年同月比 7.3%減の 67.4 千t(速報)と 4 か月連続の前年比減。うち内需向けは前年比 6.3%減の 56.2 千tで 3 か月連続の減少、輸出は 12.4%減の 11.2 千tで 5 か月連続の減少。品種別には、エアコン向けの銅管が再び減少、半導体、コネクタ、自動

車端子向けの銅条と自動車端子向けの黄銅条は 2 か月連続の減少、コネクタ向けの青銅板条は 8 か月連続の減少となった。

鉛

【海外】

2019 年 4 月の LME 鉛相場は前月比一段安の\$1,950/t 水準を低迷推移した。

英国の EU 離脱(ブレグジット)をめぐっては、英国が離脱期限を 4 月 12 日から 6 月 30 日への延長を求めたのに対し、EU は臨時首脳会議で 10 月 31 日まで再延期することで合意した。トラスク欧州理事会議長は最大で 1 年の延長を提案したが、欧州委員会(EC)執行部の任期期限である 10 月に落ち着いた。

米国経済は 3 月の連邦公開市場委員会(FOMC)の議事録により、労働市場は引き続き力強いが、経済活動は第 4 四半期に比べ鈍化したことが確認された。インフレ率は 2020、2021 年の 2%目標をわずかに上回ると予想され、今年の実質 GDP 成長率予想の中間値は 2.1%であった。米連邦準備制度理事会(FRB)は年内の利上げを見送る方針を示唆した。一方、今年第 1 四半期の実質 GDP 成長率は前期比 3.2%/年増と前期の 2.0%増を大幅に上回った。

中国経済をめぐっては景気好転を示す指標が相次いだ。第 1 四半期の実質 GDP が前年同期比 6.4%増ともう一段の減速は回避された。3 月の輸出額が前年同月比 14.2%増と 5 か月ぶりの大幅な伸びとなった。輸入額は 7.5%減と市場予想より大幅な落ち込み。鉱工業生産指数は 2014 年 7 月以来の高い伸び、小売売上高は昨年 9 月以来の高水準、1~3 月の固定資産投資は昨年 1~4 月以来の高水準となった。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2019 年 1~2 月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比 5.1%増の 838 千t、地金生産は 8.4%増の 2,047 千t、消費は 7.7%増の 2,054 千t、地金需給バランスは前年同期の▲18 千tから▲7 千tへと供給不足がほぼ解消した。2 月末の地金の報告在庫は前年同月比 11.1%減の 392 千t、在庫/消費比率は 1.9 週間から 1.7 週間にやや低下した。

鉱石生産はアメリカが 16.7%、オセアニアは 13.9%、ヨーロッパは 2.7%、アフリカは 11.8%増加、アジアは横ばいであった。地金生産はアジアが 10.5%、アメリカは 7.1%、オセアニアは 46.4%、アフリカは 5%増加、ヨーロッパは横ばいであった。消費はアジアが 13.1%、アメリカは 3.4%、アフリカは 15.8%増加、オセアニアは横ばい、ヨーロッパは 6.6%減少した。

中国は鉱石生産が 385 千tで横ばい、鉛精鉱のネット輸入は 77.1%増の 120 千t、地金生産は 16.4%増の 900 千t、地金のネット輸入は 0 から 43 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は 18.8%増の 929 千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

3/1 300 3/13 295 3/22 288 4/10 282 5/7 271

4月の鉛建値はLME鉛相場が月初から月末にかけて続落、5月上旬には271千円/tまで切り下げた。それは2016(平成28)年10月以来の安値となった。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2019年3月分=平成31年3月分)

生産 : 11,627t (前月比 28.2%減、前年比 5.1%減)

出荷 : 14,503t (前月比 9.1%減、前年比 1.1%増)

在庫 : 13,009t (前月比 18.6%減、前年比 9.7%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

3月の生産は契島製錬所の定修から前月比、前年同月比とも3か月連続の減。出荷は期末にもかかわらず、前月比マイナス。しかし、前年同月比は、輸出実績があったことで再びプラス。出荷は横ばい状態が継続中。在庫は生産減が響き、前月比減だが、前年同月比は13か月連続の増。

3. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018年度計=平成30年度計)

生産 : 194,283t (前年比 3.6%減)

出荷 : 192,307t (前年比 3.0%減)

在庫 : 13,009t (前年比 9.7%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018年度の生産は前年度比3.6%減の194千tと3年ぶりに低下した。これは1968(昭和43)年度の169千t以来の低水準。出荷は年間を通し軟調な動きとなり、結果的には、前年度比3.0%減の192,307tと2年連続で200千t台を割り込んだ。これは1974(昭和49)年度の192,074t以来44年ぶりの低水準となった。僅かな差だが、東日本大震災の影響があった2012(平成24)年度の192,897tも下回った。在庫は大きな変化がなく、概ね15千t前後での推移となった。

4. 需要部門動向

2月の自動車生産台数は前年同月比0.9%増の864,463台となり、2か月連続で前年同月を上回った。乗用車は前年同月比2か月連続のプラス、トラックも同6か月連続のプラス、バスも同2か月連続のプラスとなり、前月に引き続き、すべての車種で増加した。

3月の自動車輸出台数は前年同月比2.0%減の432,900台となり、4か月ぶりに前年同月を下回った。2018(平成30)年度の輸出実績は4,837,553台で、前年度比1.1%増、4年連続で増加した。

一方、2月の二輪車生産台数は前年同月比14.0%減の52,361台と3か月連続で前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、2月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で2,149千個(前年同月比2%減)と再び低下、自動車用以外の鉛蓄電池も640千個(同1%減)と7か月連続で減少した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,789千個(同2%減)と再び減少に転じた。

鉛関連製品生産統計

		1月	2月
自動車	数量(台)	790,114	864,463
	前年同月比(%)	107.0	100.9
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	15,051	16,530
	前年同月比(%)	91.1	101.9

(出所: (一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2019年4月のLME亜鉛相場はショート筋とロング筋の攻防が繰り広げられるなかを月初の\$3,000/t水準から中旬にかけて\$2,900割れへと急落し、その後は\$2,900台へと反発した。

LME在庫は月初の50千t水準から16日以降急増し、月末には80千t台に乗せた。亜鉛市場が供給不足から供給過剰に向かうと判断したショート筋が大量の在庫を持ち込んだことによる。これに対して、ロング筋はスクウィーズで対抗した。このため、直物/三か月先物のバックワーデーションは\$60から\$130へと拡大し、ショート筋はポローイングを余儀なくされている。

英国のEU離脱(ブレグジット)をめぐっては、英国が離脱期限を4月12日から6月30日への延長を求めたのに対し、EUは臨時首脳会議で10月31日まで再延期することで合意した。トウスク欧州理事会議長は最大で1年の延長を提案したが、欧州委員会(EC)執行部の任期期限である10月に落ち着いた。

米国経済は3月の連邦公開市場委員会(FOMC)の議事録により、労働市場は引き続き力強いが、経済活動は第4四半期に比べ鈍化したことが確認された。インフレ率は2020、2021年の2%目標をわずかに上回ると予想され、今年の実質GDP成長率予想の中間値は2.1%であった。米連邦準備制度理事会(FRB)は年内の利上げ

を見送る方針を示唆した。一方、今年第1四半期の実質GDP成長率は前期比3.2%/年増と前期の2.0%増を大幅に上回った。

中国経済をめぐっては景気好転を示す指標が相次いだ。第1四半期の実質GDPが前年同期比6.4%増ともう一段の減速は回避された。3月の輸出額が前年同月比14.2%増と5か月ぶりの大幅な伸びとなった。輸入額は7.5%減と市場予想より大幅な落ち込み。鉱工業生産指数は2014年7月以来の高い伸び、小売売上高は昨年9月以来の高水準、1~3月の固定資産投資は昨年1~4月以来の高水準となった。

供給障害要因としては、タイタンマイニングはエンパイアステート亜鉛鉱山(米)の操業の規模を縮小して継続中。夏までに操業計画を見直し、年末までにフル操業再開の可否を決定する。同鉱山は昨年30百万ドル以上の投資で操業を再開したが、昨年末に請負操業から自社操業に転換し、今年2月には作業員の半数以上を削減した。しかし、NY州労働法により労働者の1/3以上に対する解雇通知は90日後まで有効にならない。

漢中製錬の漢中亜鉛製錬所(中国)は4月9日、停止中の生産ラインの50%操業を再開した。同製錬所は3系列の生産ラインからなり、生産能力は360千t/年。昨年9月、このうち1系列がテイリングの不法投棄を理由に閉鎖命令が下された。現在、テイリング処理プラントを建設中で10月までに完成の見通し。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2019年1~2月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比横ばいの2,041千t、地金生産は2.8%減の2,121千t、消費は4.4%減の2,058千t、地金需給バランスは前年同月の+28千tから+63千tの供給過剰となった。2月末の地金の報告在庫は前年同月比9.7%減の927千t、在庫/消費比率は4.2週間から4.0週間へとほぼ横ばい推移した。

鉱石生産はアメリカが7.5%、オセアニアは42.4%、ヨーロッパは1.6%、アフリカは21.1%増加、アジアは12.4%減少した。地金生産はヨーロッパが1.7%、アメリカは11.6%、オセアニアは12.0%増加、アジアは7.6%、アフリカは6.7%減少した。消費はヨーロッパが2.9%、アメリカは7.7%、アフリカは12.5%増加、オセアニアは横ばい、アジアは8.8%減少した。

中国は鉱石生産が16.5%減の582千t、亜鉛精鉱のネット輸入は7.6%増の269千t、地金生産は9.7%減の851千t、地金のネット輸入は14.4%減の89千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は14.9%減の854千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

3/1	361	3/7	364	3/13	373	3/19	361	3/26	370	4/1	382
4/4	385	4/9	379	4/15	391	4/18	376	4/23	370	5/7	367

4月の亜鉛建値は、LME 亜鉛相場が月初から月末にかけて、概ね\$3,000/t 水準から\$2,800 水準へ下落し続けたために、下げ基調で推移した。5月上旬には367千円/tと本年3月の水準と変わらぬレベルまで低下した。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2019年3月分=平成31年3月分)

生産 : 44,623t (前月比 4.9%増、前年比 3.5%減)
出荷 : 50,378t (前月比 13.8%増、前年比 9.7%減)
在庫 : 61,445t (前月比 8.5%減、前年比 7.4%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

3月の生産は2か月ぶりの前月比増だが、前年同月比は3か月ぶりの減。出荷は期末要因で前月比プラスだが、前年同月比は輸出の差により再びマイナスへ転落した。ここに来て、高炉に元気がなく、めっき向け販売も停滞気味。前月比2か月連続のプラス。前年同月比2か月ぶりのマイナス。在庫は2か月連続の前月比減、前年同月比も6か月連続の減。

3. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018年度計=平成30年度計)

生産 : 521,160t (前年比 0.7%減)
出荷 : 526,961t (前年比 3.0%減)
在庫 : 61,445t (前年比 7.4%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2018年度の実績は前年度比0.7%減の521千tと4年連続で減少した。これは3年連続で、1966(昭和41)年度の470千t以来52年ぶりの低水準を記録した。出荷は前年度比3.0%減の527千tと再び低下した。2016年度までの約半世紀ぶりの記録的な低水準出荷へ再び戻ってしまった。全般的に需要が低迷したのが第一の要因。とくにめっき関係と輸出の低下が足を引っ張る形となった。トータルでは1966(昭和41)年度の468千t以来52年ぶりの低水準となった。ちなみに2016(平成28)年度は536千t。在庫の推移は50~70千t台で安定していた。

4. 需要部門動向

3月の鉱工業生産指数は前月比0.9%減、前年同月比4.6%減の101.9(季節調整済、2015年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月ぶりの低下、前年同月比も2か月連続の低下。中国経済の減速などを背景に、半導体関連など輸出向けの品目が減産を行った。経産省は生産の基調判断を「生産は足踏みをしている」から「生産はこのところ弱含み」に下方修正した。1~3月でも2四半期ぶりの低下となった。

業種別では、15業種中7業種で低下した。最も下げに寄与した自動車工業で、前

月比 3.4%減となった。生産用機械工業は同 6.7%減だった。電子部品・デバイス工業は 5 か月ぶりに上昇に転じた。

3 月の出荷指数は前月比 0.6%減の 101.6 と 2 か月ぶりに低下したが、前年同月比も 3.3%減と 4 か月連続で低下した。

一方、在庫指数は前月比 1.6%増の 104.0、在庫率指数は前月比 1.7%増の 107.3 となった。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、4 月が前月比 2.7%の上昇、5 月も同 3.6%の上昇を見込んでいる。ともに大幅な上昇を予測している。

2 月の亜鉛めっき鋼板生産は前年同月比 2 か月連続の減となり、弱含み状態。

2 月の伸銅品生産量は 65,024t(確報値、対前年同月比▲4.1%) (対前月比+4.1%)、対前年同月比は 3 か月連続の小幅なマイナス(12 月▲1.1%、1 月▲2.0%)。全 14 品種中、対前年比プラスは 3 品種。内需向け生産:55,116t(速報値、以下同じ)、2 か月連続の対前年比マイナス(▲2.0%)。輸出向け生産:10,523t、4 か月連続の対前年比マイナス(▲8.9%)。

黄銅製品では、黄銅条が 8,821t(対前年比▲3.0%)、3 か月振りの対前年比マイナス。黄銅棒は 15,406t、2 か月連続の対前年比マイナス(対前年比▲2.6%)。底堅さを維持しているが、設備関連が低調。

亜鉛関連製品生産統計

		1 月	2 月
亜鉛めっき鋼板	数量(千t)	885	780
	前年同月比(%)	97.3	96.4
黄銅製品	数量(t)	26,130	27,328
	前年同月比(%)	98.6	95.7
亜鉛ダイカスト	数量(kg)	1,292,057	1,404,509
	前年同月比(%)	85.0	85.7
亜鉛華	数量(t)	4,989	5,245
	前年同月比(%)	103.2	106.9

(出所:(一社)日本鉄鋼連盟、経済産業省生産動態統計調査)